

特集●地域との協働



環境プロジェクト 観光保全と体験型観光シンポジウム



体験型観光シンポジウム



体験型観光シンポジウム



サイクルトレイン



松尾鉱山跡植栽実験



松尾鉱山跡植栽実験



サイクルトレイン



サイクルトレイン

CONTENTS

特集●地域との協働
おじゃまします

木場ゼミ/ビオトープ管理士勉強会
公共政策コース シンポジウム

写真で振り返る総合政策学部の10年
学部・大学院紹介

就職状況

卒業式

学内ゴミマップ作成

風のモント達

数理の世界

単利と複利について

人事異動

キャンパスの景観

「県大アンダーグラウンド」

特集 ● 地域との協働

環境プロジェクト

田島平伸 教授

県立大学の四学部と二短期大学の英知を結集し、新たな分野の開拓幅広い地域貢献を行なうため、五つの大きな全学プロジェクトが立ち上がりました。その一つ、環境研究プロジェクトは、本学部の教員を中心として、環境条例制定の支援をはじめ、環境保全、環境教育など幅広く環境問題を取り上げ、調査研究を推進するとともに、地域貢献を積極的に行なっています。

今年度は、奥州市の環境基本条例制定に向けた支援、県立高校が取り組む岩手版環境マネージメントシステム構築に向けた支援を行なっています。



シンポジウムで講演する幸丸学部長

ました。奥州市については、条例制定後、引き続き環境基本計画への支援を行なうことになりました。さらに、これまでの研究成果を踏まえて、環境保全についてのシンポジウム「環境保全と体験型観光の推進を考えるシンポジウム」を田野畑村において開催しました。シンポジウムに先立ち、体験型観光として、サツパ船アドベンチャー、北山崎ネイチャートレッキングガイド、机浜番屋漁師ガイドを実施しました。それを踏まえ、シンポジウムでは、本学部の幸丸学部長が基調講演を行ない、引き続きパネルディスカッションにおいて、陸中海岸国立公園のより良い活かし方について多面的な議論がされました。当日は、多くの大学関係者、自治体関係者ほか地域住民に多数参加していただき、シンポジウムは活況を呈しました。

また、北上川流域の総合的な環境調査を行ない、数値目標の設定を視野に入れた実践的な研究に着手しています。四十四田ダムにおけるヒ素汚染の実態把握など、岩手県において最重要課題ともなるべき問題に対するアプローチであります。なお、これらの試みは、広く地域住民との協働を目指し、新たな環境保全の在り方を提言することを目的としています。

環境研究プロジェクトは二年目を終え、第一フェーズの最終年度を迎えますが、新たな研究成果、地域貢献ができるよう努力していきたいと考えています。

地域貢献研究会

「地域貢献は大学の果たすべき第三の役割である―教育、研究と並んで―」と、決まり文句のように言われます。では「地域貢献」とは何でしょうか。貢ぎ物を奉ること（三省堂大辞林）？



打ち合わせをするメンバー

そもそも、地方が自分の意思で様々

地域のみなさんと協力しながら、地域の問題点の解決方法を模索していくことは、本学の大事な役割のひとつです。まだ十分とは言えませんが、ここではその一部を紹介いたします。

極的に関わっています。

わたしたちの活動の特色は、「地域貢献」について教科書的な定義とは一線を画して、各専門分野の一研究者としての見解を自由に持ち寄って議論する、というところにあります。言ってみれば、専門知識を活かした活動の実態を、実践の中で少しずつ解き明かしていこう、ということですね。岩手県立大学は、様々な専門分野・人材を抱えており、そうした多様性を武器にするという戦略ですね。

いかに地域貢献の理解が多様であるかは、わたしたちが昨年執筆した論文「地域貢献活動を大学教員はどのように理解しているか」岩手県立大学総合政策学会「総合政策」第七巻第二号（二〇〇六、一七一―一八五ページ）にまとめられています。ここでは、地域貢献に取り組む動機がその先生の専門によっても、個人的考えによっても異なるということが示されています。

また、個別事例にこだわっている点も重要な特色です。同じ一つの事例について、別々の研究者がお互いの活動内容を知らないまま関わっていた、ということが調査で初めて分かったこともあります。

この夏には「地域貢献フォーラム」(<http://forum.poly-u.ac.jp/kouken/>)というサイトを立ち上げました。このサイトは、みなさんとわたしたちがともに地域を良くするための活動の出発点を目指しています。関心のある方は、是非アクセスしてみてください。

木場隆夫ゼミ



思索、そして行動するゼミは個性が会う場

木場ゼミの基本は「本を読む」こと。分野は問わず興味のままに週一冊。その都度レポートをまとめ、発表を行なっていく。

所属する三年生の高橋雄太さんはドイツの環境政策に興味を持ち、現地へも赴いた行動派。当初は下イッでの見聞を卒業に考えていたが、無数の読書体験によって変化。今後は岩手版のISO14000であるIES（岩手環境マネージメントシステム）について、調査・研究を行なっていく予定という。「読書とは興味の方角の明確化。積み重ねることによって、自分のテーマに関する知見を整理する必要がプロセスでもある」と木場教授は話す。

実は木場教授、昨年は学園祭などで高橋さんとともに「ソーラーエネルギー愛好会」として、太陽光エネルギーを利用したソーラークッカーのデモンストレーションを行なったとか。当時の困惑と驚きに苦笑しつつ「太陽光で沸かしたお湯でお茶を淹れたり、目玉焼きを作ったりして楽しめた。エネルギー問題の在り方を考えていく上で有意義なイベントだった」と木場教授がいえば、高橋さんは「先生はもっと学園祭に参加すべき」と、にっこり。

知と思索の木場教授、そして行動の高橋さん。際立つ個性の出会いが、新しいパワーを生み出している。

おこやまじま

サイクルトレイン

宇佐美 誠史 助手

自分が普段使っている自転車を列車に持ち込むことができるれば便利になつていいなと思つたことはありませんか？ サイクルトレインではその名の通り、自転車をそのまま列車に乗せて移動することが出来ます。これができる、列車を降りた後も自分の自転車を使って自由に行動することが出来ます。例えば、郊外に住んでいても街の中心部で自分の自転車に乗って動きまわったり、逆に中心部に住んでいる人が郊外で自分の自転車に乗ってサイクリングを楽しむといったことが出来ます。現行の規則ではたいていの鉄道会社の場合、折りたたみ式自転車でかつ携帯用の袋に入れた場合のみ自転車を列車に持ち込むことが出来ます。これを、折りたたみ式でもない自転車をそのまま列車に持ち込むというのがサイクルトレインです。実施状況を見ると、全国で定期的に運行しているのは十程度の事業者しかありません。



実習で駅の構造調査をする学生たち

降りることができるか)を行なったところでした。写真(表紙・本文中)はそのときの様子です。みなさん真剣に取り組んでいることが分かります。これらの調査を実施するのは日頃の勉強です。調査のために必要な基礎となるものは日常の授業などから学習し、実際の調査に当たっては、また調査に応じた基礎を勉強しなければなりません。いきなり実学実践とはいきません。問題発見、調査、分析、解決に至るプロセスは日頃の地道なトレーニングによるものが大きいと思います。それが、成果にも大きく反映されます。

このように本実習では実際の地域に落ちているネタを利用して、学生には実学実践による調査研究や教育上の効果、地域には学生ががんばった成果を還元するという一石二鳥、三鳥の効果をあげようとしています。

防災ワークショップ

牛山 素行 助教授

近年、地域住民や行政関係者、各種専門家などが参加して、集落単位など比較的狭い範囲を対象として、地域の防災上の課題や対策について話し合う、「防災ワークショップ」と呼ばれる活動(DIG、災害图上訓練、クロスロードなどと呼ばれることもあります)が各地で行なわれるようになっていきます。防災ワークショップの内容、目的、方法は様々ですが、災害に関して、当事者が、より身近なレベルで、具体的なイメージを描くことができるという点で期待が持たれており、近年の「防災白書」でもこのような取り組みが紹介されています。防災ワークショップに決まったやり方はありませんが、詳しい地図を囲んで、五、六人くらいのグループに分かれて作業・討論をし、ある程度まとまったところで発表会をする、といったスタイルがよくとられます。詳しい地図から、集落内の細かな地形の特徴を読み取るといったねらいもあります。地図を囲んで話をすることで、思いがけない方向に話が盛り上がり、いろいろな話題が出てくる、といったことも珍しくありません。

しかし、防災ワークショップは活発化してまだ日の浅い「技術」ですので、様々な課題も抱えています。誰でも簡単にできそうだからやってみた、というだけでは、良い成果につながらない可能性もあります。牛山研究室では、現在の防災ワークショップに関わる課題の把握や、効果的な実施手法に

関する調査研究を行なっています。二〇〇五年度から六年度にかけては、岩手県田野畑村沿岸部を対象とした防災ワークショップの企画・実施に協力させていただき、この結果は、岩手県および田野畑村による「安心安全促進基本計画」に反映されました。また、ワークショップ実施に先立ち、津波避難に関する意識についての分析は、各方面の関心呼び、全国紙でも報道されました。

防災ワークショップは現在、発展途上の「技術」だと思います。先行して行なわれている各地での試行錯誤や経験が、これからの防災ワークショップを作る基礎になっていくと思います。各地での実施例などを観察し、参加する多くのみなさんとともに学びながら、より良い防災ワークショップを作るための情報整理や提案を行なっていきたいと考えています。



田野畑村で行なわれた防災ワークショップの一場面

おごやまじまじ

バイオトープ管理士 勉強会



自主勉強会で切磋琢磨 成果は自信と仲間の絆

環境・生態学の分野で注目を集める資格「バイオトープ管理士」。難関とされるその試験を見事突破し、昨秋本学部第一号の合格者が四人も誕生した。顔ぶれは三年生の陰山達也さん、金子絵理さん、菅野理代さん、佐々木明穂さん。島田助手が面倒をみる自主勉強会のメンバーだ。

環境関係の資格には様々なが、「緑化や生態学はもろろん、都市計画や法律など幅広い知識が求められるのが、バイオトープ管理士」と島田助手。週一回の勉強会では先生から与えられる様々なテーマについて発表と議論を重ね、試験前には一週間みっちり集中講義。「かなり厳しかった(菅野さん)というのが正直な気持ちだったようだが、「二人じゃ、ここまでできなかった」と佐々木さん。先生の存在と仲間の励まし合格に結び付いたと微笑む。

この勉強会での経験を生かし、陰山さんや金子さんらは生物分野に関する小さな勉強サイクルも結成。興味がある人は多いと思うから「一二年生にも門戸を開いている。バイオトープの知識をきっかけに自然環境を大切に人が増えてくれれば」と、島田助手も今後の展開に期待している。

ローカルマニフェスト

齋藤 俊明 教授

二〇〇七年は統一地方選挙の年です。岩手県でも、知事選挙を皮切りに、県議会選挙をはじめ、市町村長選挙が実施されます。そして、公職選挙法が改正され、都道府県知事や市町村長の選挙において「マニフェスト」を作成して、配布することができるようになりました。

マニフェストがはじめて登場したのは、四年前の統一地方選挙と衆議院議員選挙においてでした。そして、マニフェストという言葉は、二〇〇三年の流行語大賞に選ばれました。

四年前の岩手県知事選挙でも、増田寛也前知事がマニフェストを



県知事マニフェスト検証大会での討論の様子

掲げて選挙に臨みました。それが契機となって、「ローカルマニフェスト推進ネットワークいわて」が結成され、本学部の齋藤俊明教授が共同代表をつとめています。

その後、齋藤教授と日本青年会議所岩手ブロック協議会が中心となってマニフェスト型公開討論会を開催し、マニフェストの普及につとめてきました。また、齋藤教授は、二月に、増田前知事のマニフェスト評価を公表しました。評価は、増田知事の自己評価が七〇点であったのに対して、齋藤教授の評価は六六点でした。

マニフェストは、一九世紀の半ばにイギリスの国政選挙においてはじめて用いられ、その後、選挙のたびに各政党によって作成され、百年以上の歴史があります。日本でも、選挙のときには「公約」や「政見」が政党や候補者によって示されてきました。しかし、その大部分は、「口約束」に終わる傾向がありました。

そうした傾向に終止符を打つために、導入されたのがマニフェストです。マニフェストは、政策を実現するための期限・財源・数値目標・工程を明示した有権者との「契約書」です。契約書ですから、当選後には、それを実行しなければなりません。

しかし、導入されて間もないこともあり、マニフェストの作成の仕方、期限・財源・数値目標・工程の明記だけでなく、契約が守られているかどうかを確かめるための評価の仕方など、まだまだ問題があります。そのため、齋藤教授は、大学院の授業科目に「マニフェスト研究」を設け、普及のための調査研究を行なっています。

松尾鉱山跡植栽実験

平塚 明 教授
山田 一裕 助教授

八幡平市にある旧松尾鉱山跡。かつて「東洋一の硫黄鉱山」として隆盛を極めたその場所は、閉山から三〇年以上経た今も坑内から溢れ出る強酸性水のため、植物がほとんど生えない不毛の地のまま存在しています。



学内での植栽実験

この問題の解決を目指し、近年は市民による森の再生活動が高まりを見せるなか、研究者としてそれぞれの専門分野からの検証・実践を試みているのが、環境政策講座の平塚明教授と山田一裕助教授です。

二〇〇二年より植樹活動に参加していた平塚教授は、その目的を「鉱毒水の量を抑えること」と説明。樹木による表土再生が鉱毒水の大量流出をセーブし、かつ樹木の消費活動（蒸散など）による水分量の減少が狙いといえます。とはいえ、対象地は極めて過酷な環境ゆえ、試行錯誤を

経て「どのような樹種や、植え方がいいか分かってきた」と話します。

そんな平塚教授が注目しているのが、貧栄養の場所に生育するパイオニア植物の「アキグミ」と「ミヤマハンノキ」で、根には植物に欠かせない窒素固定細菌が存在。この二樹種を中心に、昨年は「ブナやミズナラなどを合わせて密植」。森の成熟段階から考えると無茶ですが、切磋琢磨の結果、強い樹が残っていきげ」と教授。対象地では既にミヤマハンノキの繁茂が見られます。さらに、現在は大学構内にも植栽実験中。「追跡調査も続けながら「自然の力」を見つけ、一番いい方法を探っていく」と語ります。

一方の山田一裕助教授が試みている研究は、植樹とともに実践可能な方法と考えられる土壌の改善。昨年は鉱山跡から約三トンの土を採取し、大学構内で大型ポットを使って様々な植物生育実験を始めています。

「莫大な資金を投入しなくてもできることはある」と話す山田助教授の方法は、土質改善に水産廃棄物のカキ殻等を使用し、変化を知るための指標としてダケカンバやナナカマドなどの樹種を植栽するもの。カキ殻を選んだのは「カルシウムを多く含んでいるので土壌中和剤として役立つし、廃棄物の再利用も促進できるから」。そこには「北上川の上流と下流の問題をとくに解決したい」という、総合的な環境問題解決への願いもあります。もちろん成果が見えてくるには時間がかかりますが、「八幡平実習を通し、問題解決への意識や下地はできていた」と山田助教授。いつそう多くの学生の参加も期待しています。

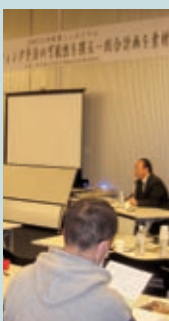
岩手の公害の原点である松尾鉱山跡の緑化は、協働の精神も学ぶ、生きた環境学習の機会といえそうです。

「2007 公共政策シンポジウム」が開催される

平成十九年二月三日(土)、大学院総合政策研究科主催の公共政策シンポジウム「市民協働による政策マーケティング手法の可能性を探る」総合計画を素材に」が、いわて県民情報交流センター・アイーナで開催された。このシンポジウムは、昨年四月に本学アイーナキャンパスに開設された公共政策特別コース(博士前期課程)の演習科目「政策マーケティング演習Ⅰ・Ⅱ」の成果発表会を兼ねたものである。

シンポジウムでは、まず、政策マーケティングに関する国内の三つの事例(青森県、愛知県東海市、本県滝沢村)の報告と、公共政策特別コースの大学院生による調査研究報告が行われた。続いて、齋藤俊明教授をコーディネーターとするパネルディスカッションが行われた。パネルディスカッションでは、政策マーケティング手法の現状と課題について、主に総合計画の政策形成サイクルへの市民参加の側面から議論が行われた。当日は、県内の自治体関係者をはじめ多数の参加者があり、その後の質疑応答も活発に行われた。

今回の大学院生の報告内容は、シンポジウムでの議論を踏まえて加筆修正され、最終的には報告書として公表される予定である。なお、公共政策特別コースでは、調査研究の成果を地域に広く知ってもらうため、今回のようなシンポジウムを今後も継続的に開催するとのことである。



写真で振り返る 総合政策学部の10年

総合政策学部がスタートして今春の入学生がちょうど10期生になります。あっという間にはありましたが、中央コンコースの樹木はすいぶん大きくなりました。



第1期生(1998年4月28日)



工事中の大学 (鹿島建設株式会社撮影)



毎年夏のさんざ踊りには、大学の学生・先生たちがたくさん参加します。上は県立大として初めて参加したときの様子です。先頭には西澤前学長がいます。



第9期生(2006年4月10日)



宮古短期大学部との合同研修 三陸海岸横断「走るゼミナール」(1998年7月14日)



初年度と二年目は、三陸まで合宿しながら様々な体験学習をしました。上は三陸鉄道の中での一コマ。

学部・大学院紹介

【学部紹介】

「総合政策学部って、どんなことを勉強しているのだろう？」と思われる方が多いのではないだろうか。総合政策学部とは、現代の社会問題を多角的な視点から考え、最適な答えを導くための勉強をする学部です。現在の社会問題に対する解答は、これまでのような縦割りの学問分野に基づく学部構成(例えば「理学部」、「法学部」、「経済学部」など)では見つけるのは難しくなってきました。これは私たちの社会が複雑化し、価値観が多様化してきたからです。問題解決のためには様々な視点が必要となります。

本学部では様々な社会問題に対応するため経済・法律・行政・社会学などの文系と、工学・生態学・社会学など多様な分野が揃っています。学生自らが関心を持っていて、その人の専門領域となり、専門の学問分野を勉強しながら他の分野も組み合わせ、課題に取り組みということが本学部の大きな特徴といえます。そのため「まちづくり・まちおこしに興味がある」、「生物と共生する社会を考えたい」、「行政について勉強して公務員になりたい」など、多様な目的意識を持った学生がそれぞれのアプローチで勉学に励んでいます。

三年生からは行政・経営コースと環境・地域コースに分かれますが、平成十九年度の三年生からは両コースとも実習課題が必修となります。実習では机上の勉強ばかりでなく、社会問題を実践的な形で取り組むこととなります。

【研究科(大学院)紹介】

「研究科で直面する現実の問題を解決するための基本的な知識や能力を身につけるのが学部である一方で、研究科(大学院)は、問題解決をしていくために必要な総合的・実践的な能力を養っていくところです。現代社会が抱える諸問題の背景を解き明かし、それらの根本的な解決に向けて具体的な提言を行えるような人材づくりに取り組んでいます。ここでは、特に博士前期課程について説明します。

博士前期課程には『法・経済・経営政策系』、『環境・地域政策系』、『公共政策特別コース』があります。それぞれ別の研究テーマの一例を挙げると、『法・経済・経営政策系』では「条例における刑事制裁の諸問題」、「情報化の進展と中小企業 特に地場産業に着眼して」など、『環境・地域政策系』では「農村地域における防災と環境保全」、「クマタカカ生熊からみた保護政策」などが挙げられます。いずれも現実の問題をいかに解決していくかという視点で研究が行われています。公共政策特別コースは盛岡駅西口の県立大アイーナキャンパスにおいて平日夜間、土曜昼間開講され、社会人の方にも修学しやすいようになっています。実践的知識の修得と政策のプロフェッショナルの養成を目指しており、政策課題を常に現場で考え、解決策を探る場を授業の中にも取り入れています。

研究教育課程

前期	法・経済・経営政策系 環境・地域政策系 公共政策特別コース
後期	行政・経営政策領域 環境・地域政策領域

教育課程

- 行政・経営コース
 - 行政・社会講座
 - 経営・経済講座
 - 政策科学講座
- 環境・地域コース
 - 環境政策講座
 - 地域政策講座

実習

- 行政・経営コース
 - 【前期開講】政策課題実習
 - 【後期開講】社会学実習
 - 社会学調査実習
 - シミュレーション技法実習
 - 経営分析実習
 - 多変量解析実習
 - ゲーム理論実習

●環境・地域コース

- 環境調査実習Ⅰ・Ⅱ
- 地域環境調査実習
- 地域調査実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

就職状況

首都圏では、最近の好景気を反映して、就職状況が好転しつつありますが、その影響は県内にまでは十分及んでいません。このようなか中で、三月十五日現在、本学部四年生の就職希望者九七名中九一名が内定しています。内定率は九三・八%で、昨年をやや上回る結果となっています。

業種別に見ると、金融・保険業の躍進が目立ちました。金融・保険業の内定者は一番多く二三名に上りました。次いで多いのは卸・小売業の二名、サービス業の一名でした。この上位三業種で全体のほぼ三分の二に達しました。七十七銀行、岩手銀行、野村総合研究所、NTTドコモ、関東自動車などに就職が内定しています。

公務員も五名内定し、前年度よりも大幅に上回りました。岩手県警、盛岡市をはじめ、県内外の地方自治体へ内定が決まっています。

就職支援活動の要諦は、学生諸君の就職意欲と求人側のニーズを如何にマッチングさせるかということだと考えます。そのためにも早い時期から学生諸君の職業観を確立するための取り組みをして行きたいと思っています。

(就職委員会)

●業種別の就職内定状況 平成19年3月15日現在

業種	就職者数
金融・保険業	23
卸・小売業	21
サービス業	19
情報通信業	9
地方公務員	5
建設業	4
製造業	3
不動産業	2
飲食店宿泊業	2
医療保険業衛生	1
教育・学習支援事業	1
複合サービス業	1
合計	91

平成18年度卒業式



前日の悪天候が嘘のような爽やかな天気恵まれた三月二十三日(金)の午後一時三十分より、学位授与式が行われた。今年度から式場が盛岡市民文化ホール(マリオス)となり、大きな会場で多くの方々祝福されながら開催された。

学長賞では、総合政策研究科および総合政策学部からは、岡田久仁子さん(博士後期課程)、佐藤文吉さん(博士前期課程)、小林侑司さん(四年生)が、非常に優れた学業成績または研究成果を収めたことを表彰された。また、下級生の有志が参加して本学の学生歌「風のモン」を熱唱して卒業生の門出を祝う場面も見られ、和やかな式となった。

その後、いわて県民情報交流センター(アイーナ)で総合政策研究科と総合政策学部の学位伝達式が行われ、幸丸学部長より各人に学位記が授与された。今年度は大学院総合政策研究科博士後期課程一名、博士前期課程五名、総合政策学部第六期生一〇五名が晴れて卒業を迎えた。卒業生の社会でのますますの活躍と飛躍に期待したい。

学内ゴミマップ作成

「思ったことは行動してみよう」と考えて、最近様々なことを行なっている金野佳幸君(三年生)。大学生活の中で大学のタバコの吸い殻が気になった。いつも掃除してもらってキレイになっっているはずなのに、ずいぶん落ちてくるような気がする・・・そこで十月くらいから不定期に身のまわりで拾ってみると、やはり結構見つけた。雪の降る前に一度、大学全体をキレイにして、その状況を知りたいということから友人に声をかけ、十一月二十二日に一名でゴミを拾い、分布図を作成した。その結果、二時間ほどで吸い殻が四九二本、その他のゴミが三〇六個と、多くのゴミが見つかった(左図参照)。一人一人の意識が高くなれば、吸い殻もゴミも少なくなるはずなのに・・・まずは多くの人にこの現状を知って欲しくて学内HPに図とコメントを掲載してもらった。

これからの同様の活動をしていきたいと語るが、「多くの人に現状に気づいてもらい、行動(吸い殻やゴミを捨てない・ゴミを拾う)してもらうためには、どうしたらいいだろう」と頭を悩ませている。



風のモンターダ

社会人大学院生として公共政策を研究。問題意識があれば学問の扉は開かれる!

博士前期課程1年 菊地信輝さん

県職員として、道路整備から都市計画など様々な公共事業に携わってきた菊地信輝さん。5年間関わった盛岡駅西口のアイーナ整備の終了を契機に「これまでの行政運営の在り方を自分なりに見直したい」と、昨春総合政策研究科公共政策特別コースへ入学した。今は高嶋裕一助教授のもと、公共施設などの大規模施設事業を数理分析を用いて評価しようという研究に取り組んでいる。

「総合政策は、複雑な社会問題を紐解く“鍵”になると予感した」。行政を取り巻く環境の変化は、現場にいた菊地さんにとってリアルな現実だった。求められるのは、社会変化に対応した政策と、その政策形成過程を県民に分かりやすく伝えるためのシステム化。「データや数値など科学的な裏付けはやはり必要。その上で政策へ展開する論理的思考を育むのが県立大学で学ぶ大きな目標です」と話す。同期の仲間8人の多くも公共政策に携わる行政職員ゆえ、議論の方向性や内容も非常



に明快。「それぞれの発言の重みが刺激になる」と、かなりの手応えも感じているという。

いったん社会に出た後の大学院入学で不安もあったが、社会人入学の試験は、研究計画書の提出と面接なので「本人のやる気さえあれば大丈夫!」と語る。「仕事で抱いた疑問や関心を大切に育てておくことが大事」と、働く中で感じた問題意識こそが学問へ取り組む原動力になるという。社会人こそ実感だろう。実務と学問をつなぐ人材としての活躍が期待される。

積極的な社会参加で得られた目的意識。春からは盛岡市職員として頑張ります

4年 高橋知芳さん

「生まれ育った盛岡市で働きたいという気持ちを前面に出しました」。

難関中の難関、盛岡市役所職員の内定が決まった高橋知芳さんは、うれしさをにじませながら公務員試験に臨んだ時の思いを話す。2年次から取り組んできたという試験対策は独学と通信教育の二本柱。ゼミでは天野巡一教授

のもとで社会における自治体の在り方を研究し、しかも自主ゼミ「Grish」の発起人としても活動してきたというバイタリティの持ち主である。

そもそも行政の仕事に興味を持ったのは、実は「Grish」がきっかけ。滝沢村環境パートナー会議に参加し、ゴミ減量グループの一員として活動する中で村職員との交流を得た。「みなさんきちんと住民の意見を聞いてくれる。公務員のイメージが変わったのはもちろん、やりがいある仕事と感じました」。その延長上に描いた夢が盛岡市職員への道。入庁の4月を控えた今は、「早く仕事をしたい」と意欲十分。市民との協働に関わるプロジェクトを手掛けてみたいという目的もある。



「自分なりに目標を立てて、周りに何をいわれようと諦めないことかな」。合格の秘訣をそう話す高橋さん。このまちに必要なのは何か? 明確な目的意識は、様々な活動を通して得られた財産だ。「いろいろな体験をすることで人生も変わっていくから、自分の目標や価値観を見つけれられるような大学生活を送ってほしいですね。」と後輩へエールを送る。

数理の世界

単利と複利について

Tee KianHeng

皆さんは自分の預金口座の利息額がどのように計算されたか疑問に思ったことはないでしょうか。利息額は預けた金額(元金という)に対する報酬であり、利息額の元金に対する割合は金利といい、預金の種類(普通・定期・貯蓄など)や預けた期間(3ヶ月・6ヶ月・1年など)によって異なり、また単利あるいは複利という計算方法のもとで算出される。計算方法によって利息額にかなり差が出るので、今回はこの計算方法について紹介したい。

普通預金はいつでも引き出せるので金利が低く(複利計算)、定期預金は満期日まで引き出さない約束のかわりに普通預金より高い(複利あるいは単利)。金融機関の預金商品の組合せが多様であるが、ここでは単純化して単利と複利の計算のみを考える。

元金X、金利がr%とすると、満期のn年後に単利: $X(1+n \times r\%)$ 円、複利: $X(1+r\%)^n$ 円が戻ってくる。

単利とは、元金が変わらず毎期利息がもらえる金利計算のことである。例えば、元金100万円を3年間単利1%の定期預金で銀行と契約したとしよう。上式から、3年後には元金100万と利息分の3万円が103万円が戻ってくる。

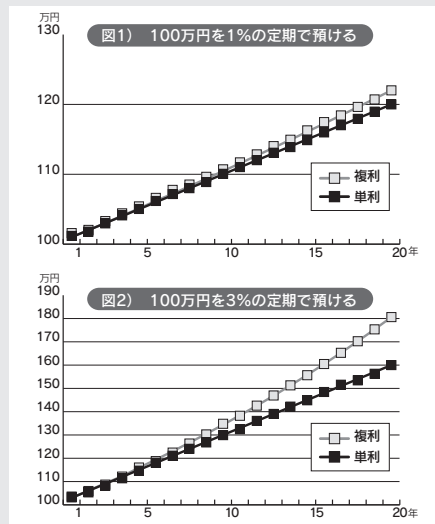
一方、複利は毎年元金が変わる計算となる。上述の条件で、3年後には元金100万円と利息分3.0301万円(1万円+1.01万円(2年目の元金が101万円)+1.0201万円(3年目の元金が102.01万円))が戻ってくる。

上述の結果から分かるように、単利と複利とでは301円分複利が有利になることが分かる。301円は少ないと思われるかもしれないが、図1に示してあるように、預金金利が1%であっても預ける期間が長ければ長いほど、複利が有利である。また、図2に示してあるように3%であれば、かなり複利に有利である。

最後に、100万円を複利のr%で何年定期預金をしておけば200万円になるかを考えてみよう。例えば複利5%であれば、 $100(1+5\%)^n=200$ にしたいので、 $(1.05)^n=2$ となる。両辺に対数を取ると $n \times \ln(1.05)=\ln(2)$ となり、 $n=1n(2)/\ln(1.05)$ となって、結果は $n=14.21$ 年となる。つまり、複利5%を銀行に14.21年預けると元金の2倍

の金額が戻ってくる。また、もし金利が0.5%であれば139年で元金の2倍の金額が戻ってくる(各自で確認してほしい)。つまり、現在の金利で元金の2倍の金額が戻ってくるのは100年以上要することになる。

(本学部講師・計量経済学)



人事異動(順不同)

転出者(3月31日付)

氏名	種別	職名	転出先
徳久 勲	退職	教授	本学客員教授
南島 和久	転任	助手	長崎県立大学

採用・昇格者(4月1日付)

氏名	種別	職名	前職	分野
田中 信孝	採用	教授	八戸大学ビジネス学部教授	ファイナンス
吉本 繁壽	採用	教授	(独)情報通信研究機構	メディア論
山本 健	採用	講師	横浜国立大学経済学部非常勤講師	経営学
乗田 但馬	採用	講師	東北文化学園大学講師	財政学
見市 建	採用	講師	外務省シンガポール大使館専門員	国際関係論
吉木 岳哉	昇格	准教授	本学部講師	地理学
Tee KianHeng	昇格	准教授	本学部講師	統計学
篠木 幹子	昇格	准教授	本学部講師	環境社会学
山田 佳奈	昇格	准教授	本学部講師	社会構造変動論

キャンパスの 景観②

県大アンダーグラウンド
平塚
明



地下汚水処理施設。床穴の下に汚泥タンクがある

ときには携帯電話)を除いた後、床下のタンクに貯められる。

この施設では微生物の力を借りて汚水中の有機物を分解している。微生物たちが好む酸素を吹き込むためのモーターが常にうなり声を上げている。汚泥は掻き集められ、水分は塩素で殺菌され、pH(ペーハー)を調節されてから県大アーチ東側の第一調整池に流れ込む。池の水位が上がった分だけ、東側の水草に隠れた排水口からあふれ出し、北上川に流される。

このように大学は自前で汚水を処理して来た。ちょうど今年、付近の公共下水道整備がようやく完了した。排水の処理について、これからは二通りの選択肢が用意されたことになる。

建物の地下部にも多様な空間が広がっている。重油を燃やして自家発電し、その排



学部棟下の共同溝。廊下の真下である

熱を構内の冷暖房や給湯、プールの昇温に利用する「コジェネレーションシステム」、配管配線を束ねている「共同溝」、そして「クールヒートトレンチ」である。クールヒートトレンチ

は各学部講義室の真下を、廊下に平行して走っているトンネルである。人が立って通れるほどの大きさだ。地上部を支える梁がところどころに降りてきているが、それ以外には何も無い。この空間は一年中安定した地中熱を利用して、中の空気を冬は外気より最大9℃高く暖め、夏は最大6.7℃低く冷やしている。空気は、コジェネレーションの空調機でさらに加熱・冷却され、各室内に送られている。

冷暖房費そしてCO₂排出量の削減にも役立っている、このトレンチの総延長は1,300m。こうした地下施設を見て回るのは楽しい。景観・環境配慮型の大学を私たち自身ももっと知っておきたい。

(本学部教授・植物生態学)



クールヒートトレンチ。学部棟の長さだけ続いている

なお、大学の省エネについては次のサイトが詳しい。

●イブエコ <http://www.iwate-pu.ac.jp/office/syomu/info/eco/top.html>

●ご意見をお待ちしています

MONTOへのご意見・ご感想・ご要望は、氏名、住所、電話番号を明記の上、「総合政策学部広報・交流委員会」宛てで、下記連絡先まで。総合政策学部ホームページの問合せ先への電子メール送付でも構いません。よろしくお願いいたします。

MONTO

●【MONTO】岩手県立大学総合政策学部ニュース Iwate Prefectural University

●第17号：2007年(平成19年)4月4日 ●発行：公立大学法人岩手県立大学総合政策学部 〒020-0193 岩手県岩手郡滝沢村滝沢字菓子152-52

代表TEL019-694-2000 学部019-694-2700 FAX019-694-2701(学部事務室)

印刷/株式会社社陵印刷 TEL019-641-8000

《MONTO WEB版》URL

http://www-poly.iwate-pu.ac.jp/monto/index_monto.html

*岩手県立大学のホームページ <http://www.iwate-pu.ac.jp/> から

総合政策学部をクリックして、次に「学部機関紙MONTO」をクリックしてもアクセスできます。

●編集後記

▼本学部もいよいよ十年目を迎えました。苦しい入試シーズンを見事通過して入学された新入生に大いに期待します。広大なキャンパスの景観再整備が始まりますが、学生の皆さんも植樹活動に参加して、一緒に思い出を創りましょう(Birds)▼総合政策学部では、どのような勉強や学生さんの悩みを時折耳にします。今回の特集の内容が、そのような悩みを解消する一助になれば幸いです(S)▼四月から行政・経営コースでも実習科目が始まります。自治体政策、地域経済、企業経営などの具体的な地域課題を題材に現地調査が行われる予定です。教員だけでなく学生も含めた地域協働が、今後ますます充実していくことでしょうか(b)▼開学十年の記事を集める際に様々なお話を聞くことができました。大学の歴史としては大変短いかも知れませんが、実にいろいろなことがあったようです。今後も学生達と一緒に学部の新たな歴史を刻んでいきたいと思えます(な)

●写真取材協力 鹿島建設株式会社
●編集スタッフ 山井正敏(編集責任者)、篠木幹子、堀籠義裕、島田直明
●記事中の職位・学年は二〇〇七年三月現在のものです。